



運搬

71
まいん

にはまくちやあと

新居浜口屋跡



新居浜口屋

明治10年代撮影 別子銅山記念館所蔵

別子の銅山から
世界へ羽ばたく
銅の道

銅の道

にはまくちや 新居浜口屋

は、別子山中で製錬された粗銅(含銅量約80パーセント)を大阪へ送るための玄関口となる所です。元禄15年(1702)8月に開設されました。

新居浜口屋から送られた粗銅は、大阪の長堀吹所(精錬所:明治5年、町名変更より鰻谷吹所)で精銅され、長崎貿易用と国内販売用に製品化されました。



当時から残る松



かつての銅の道は今も賑わっている

別子銅山の銅は幕府の財政を大きく支え、世界へと飛び出して行ったのです。新居浜に口屋が開設されるまでは、別子山中から土居の天満浦まで約35キロメートルの区間を運搬していました。それが、銅山越をして、立川中宿を経由する道のりとなり、約16キロメートルに縮められることとなりました。

運搬方法は、別子山中から立川中宿までの約10キロメートルを仲持ちによる人力、立川中宿から新居浜口屋までの約6キロメートルを牛馬車で行いました。

新居浜口屋から別子山中への運搬道は「登り道」と呼ばれ、今も商店が並び、賑わいを見せています。

新居浜に口屋が開設されたことで、新居浜が大きく発展していくこととなりました。



一宮神社横を通る登り道



どれくらい?

左の写真は、マイントピア別子端出場ゾーンの観光坑道の中にある仲持ちです。

男性と女性、どのくらいの荷物を背負っていたでしょうか?

答えは、裏にあります。

